

松本清張

ガラスの城

松本清張
ガラスの城

講談社

ガラスの城

昭和五十一年九月三〇日第一刷発行

(文1)

著者——松本清張

© Seicho Matsumoto 1976, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—四四—二二 振替東京八一三六

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

第一部 《三上田鶴子の手記》

5

第二部 《的場郁子のノート》

205

装帧 ● 伊藤宪治

ガラスの城

第一部 《三上田鶴子の手記》

1

東亜製鋼株式会社の東京支社は、数年前に建った都心の高層ビルの十四階と十三階を借りきつて、男女従業員二百名を擁^{よう}している。

支社長は専務で、もう一人の重役が総務部長をかねている。大阪が本社だが、政治面、金融面で、支社とはいいいながら本社なみの陣容をもっている。

販売部は、第一、第二の二つの課に分かれている。これは、取引先の種類と、大口、小口との区別から分類されている。各課に五十人の課員がいる。

——三月に入った。

春秋二期には、各課ごとに二日の休日を利用して社員の慰安旅行がある。その期日が近づくと庶務課から希望地の投票がおこなわれる。

しかし、この慰安旅行も、ほとんど行くべき所はこれまでにいつている。東京から一泊二日で

は、行動半径もおよそきまってしまう。これまでいったところは、箱根、熱海、伊東、下田などの、湘南伊豆地方や、日光、鬼怒川、塩原、伊香保、水上など、二回以上重なっているところもある。たいてい温泉地がえらばれるのは、こういう旅行の性質からだ。

庶務係からまわされた回状を見ても、わたしはべつに興味もなかった。

「恒例により、来る三月二十一、二十二日の両日、課の親睦を兼ねて慰安旅行をしたいと思います。つきましては、旅行地の選定についてみなさんのご意見を参考にして立案したいと思いますから、これと思われる候補地をご記入ください。 幹事」

去年も、おとどしも、こういう回状がまわってきた。みんなが勝手な所を書きこんでゆく。

けれど、いちばん投票の多かった所がかならずしも選定されるとはかぎらない。それをきめるのは二人の次長と、庶務主任とだった。最終的には課長が裁断するが、まず、三人の相談できまるといっていい。それは予算と日数の関係からである。

早朝の列車で現地にいき、その日は団体行動で旅館に一泊する。翌日はてきとうに自由行動となって東京に帰ってくる。これは慣習となっていて、これからかわりそうにない。

だから、しぜんと遊覧地の条件も限定されてくる。あまり遠出はできないのである。これまで、京都、奈良、十和田湖、秋田、北陸の金沢も投票に現われないことはなかった。えてしてこういう遠隔地をえらぶのは、ほとんどが若い社員である。

しかし、これは、予算の関係からいつもしりぞけられた。

女性にとつては、会社勤めも三、四年たったら、一種の惰性になつてしまう。春と秋のこの旅行はその中の一つのアクセントかもしれない。感動のないアクセントだ。おぎなりの親睦、冒険

のなさ、退屈な見物、束縛された行動――。

わたしはメモに、

「木曾」

と書いた。それを四つに折って、庶務係の和島好子のところにいった。

彼女の机のよこに、空函を利用した投票函がある。なかをのぞいてみると、目けんとうで二十枚ぐらいはあつまっていた。

「三上さん」

庶務主任の田口欣作がイスの背へ上体をたおして、わたしを見ながらニヤリと笑った。

「ええとこ書いてくれはりましたか」

田口は大阪の本社から去年東京に移った男で、三十五、六だが、若白髪というのか、もう、耳の横が白くなっている。

「いいえ、平凡なとこですわ」

「さやか。どこぞ、ええとこがおましたかいな？」

「よくわかりませんわ」

わたしははじめから投げている。

「ぼくなんか大阪から移ってきたよってに、こっちの事情はさっぱりですわ。ほんまに、みんながあつというところが出まへんやろかな？」

田口はのんびりとしていた。課長の杉岡久一郎が席にいないからだ。そういえば、二人の次長まで気楽な顔をしている。

いや、課ぜんたいの空気が春風がふいているようにのどかなのである。

この庶務主任の田口にしても、課長がいるとたえず緊張している。何を書くのかしらないが、帳簿を引っぱり出しては、しきりと書きこむふりをする。その合間にはいつでも課長に呼ばれる態勢をとっているのだ。たえず忙しいかつこうをしているのがこの男の特徴で、部下の庶務係に叱言こごごをいうのもこのときである。

そのかわり、課長がいなくなると、部下の機嫌をとったりする。庶務係は、四名のほかに、タイピスト三人も管理している。

この田口は、課長がいなくなると、各係のほうへ油をうりにゆく。

「今度の慰安会は優秀だっせ」

かれの声が昨日もわたしのちかくできこえていた。

「A社から二十万円、B社から二十五万円。C社からも二十万円。それに、出入りの商人からも五万円ずつ祝儀をもってきよましてな」

A社も、B社も、C社も、この東亜製鋼の専属販売店だった。いわば本社を大事とおもっている取引商社なので、毎度、かならずなにがしかの寄付をする。今度は例年よりも額が多いというのだった。田口はそれも自分の腕だと聞き手にとれるような吹聴ふいちょうをしていた。

「そりゃ優秀だな」

次長の富崎が、癖になつて肩をあげて笑った。

「田口君、寄付は一文も残すことはないからね。みんな飲んでしまおうよ」

「へえ、ぼくもそうおもうてまんねん」

田口はすかさず調子を合わせた。次長のひとりはおもに外交方面を担当し、ひとりは内勤を見ている。内勤の次長が富崎弥介だった。

富崎は杉岡課長の側近をもつて任じている。こまかいことに氣のつく男だが、自分では豪放なところを見せようとしている。

もうひとりの次長野村俊一は、仕事の關係からあまり席にいたことがないが、年齢は課長と同じだった。大学時代はテニスの選手だったというが、今でも長身で、均斉のとれた体格をしている。むろん、富崎などよりは先輩だった。出張の多いその野村が今日は席にいて、外交日誌か何かをつけていた。次長としては外交担当が内勤担当より上位だが、課長に氣に入られている富崎に、かれはなんとなく一目おいているふうがあった。

「なあ、野村君」

と富崎は年上の先輩を君づけにして大きな声を出した。

「それでいいだろうね。寄付の金をみんな酒代にしようぜ」

「そうだな」

野村はどっつかずの返事をしながら、うつむいてペンをうごかしている。

わたしは、こういうときの野村に多少の齒がゆさをもち、また同情する。たえず富崎に主導權をとられているからだ。

すかさず横から田口が口を出した。

「富崎さん、それで少しは甘いもんも買うてやらんと、女子社員にうらまれまっせ」

田口は富崎に抗議をしたのではない。顔いっぱいにあいそ笑いをうかべている。

「そうか。そりゃたいへんだ。そのへんは田口君にたのまなきやならないな」

「へえ、よろしゅうおま。ぼくがあんじようやりまっせ」

わたしは、こんなときの田口を見ると虫酸^{むしず}が走る。

わたし三上田鶴子は、毎朝、阿佐谷の家からラッシュの地下鉄にゆられて出勤する。そのころの乗客はほとんどが勤め人と学生である。勤め人の顔には、すでに疲労がはじまっている。家庭を出たとき、かれらはすでに仕事のコンペアに乘せられ、疲労のベルトの端にかれらは脚を付けている。

駅から吐き出されると、みんなそれぞれの職場に散ってゆく。だれもが急ぎ足になってゆく。今日の情性と疲労をもとめて急ぐのである。

わたしは駅から歩いて数分の距離にある高層ビルの中にゆく。外観はおりからの朝の陽をうけて総ガラスの窓がきらめいている。壮大なガラスの城である。ガラスは反射鏡のように、周辺のビルの風景を、光と影の対照で映していた。なかほかがやくばかりに明るい。

この中に入っている会社は一流会社ばかりである。男の社員は髪に櫛目を入れ、服装を身ぎれいに整えている。OLは目立たないが上手に化粧をし、スマートな身装（みしょう）をしている。みんなガラスの城に入ってゆくにふさわしい人種ばかりといったふうに。

わたしも女子大を出てこの建物の中に入ったときは誇りと喜びとに胸がふるえたものだった。ビルはその春に完成したばかりだった。わたしにはすべてが新鮮にみえた。自分のものときめられた机の上のペン一本にも新鮮さがあった。

夢をその中で期待した。

それから六年たった。今のわたしには、その夢もうすくなり、色あせている。

男子社員はほとんどが大学出だが、インテリジェンスは少しも見られない。かれらは酒を飲み、マージャンをし、かげで上役や同僚の悪口をいいあっている。

もはや、学生時代に論じた唯物史観も、経済論も、革命への共感も、学内デモも、その饒舌とともにおきざりにしている。かれらはもはや機構の中に去勢された人間となっていた。

将来の出世と、目前の功利主義とがかれらを支配している。そのために、昨夜は、マージャンとともにたのしんだ相手を、今日は職場から蹴おとしてはばからない。肩を抱いて酒を飲みあった仲でも、翌朝はけろりとしてだれかの耳もとでその男を誹謗している。

東亜製鋼株式会社といえば、日本で一流の企業体である。その社員は、すべてかがやかしい前途をもち、活気にあふれて仕事に精励しているように外部では見える。

しかし、この中に入ってみると、そこにおのずから二つの流れがあるのに気づく。一つは日光のかがやく場所におかれた人びとだ。これは社長や専務など重役の主流につながっている。末端が課長クラスだとすると、その下にいる部下もその支流の中にいる。

反対は、まったく希^{のそ}みをたたれた人びとだ。その社員たちが幹部の政策に反対しているわけではない。そんな意見をもつことを許されるのは、部長以上の資格者だけである。日かげの場所にいる男たちは、おもに課長の好みで、せまい範囲でポジションが左右される。

この販売部第二課の五十人の中で、はつきりと主流を泳いでいる者は四、五人にすぎない。日かげの人間は二十人ぐらいであろうか。その中間は、まだどっちともつかないかっこうでいる。かれらはいつも陽のあたる場所に位置をもとめている。

もつとも、わたしたち女子社員八名はそこから除外されている。

この課にはタイピストが三人いる。あと五人が計算係、庶務係、管理係に配属されている。わたし自身は管理係となっている。

しかし、しょせん、女子社員は男子社員の事務補助にすぎない。いつまでたっても同じ仕事の

くりかえしである。あたえられる仕事に希望も進歩もないし、もとより栄転もない。

毎年春になると、新しい社員が入社してくる。この人たちは初歩の仕事からおぼえこまなければならぬ。それを教えるのは女子が多い。つまり、女子のうけもつ分担が、この会社ではひどく初歩の部分にあたるというわけである。

しかし、新入社員は「見習期間」をすぎると一人前の仕事をあたえられ、いつのまにか、わたしたちを追いこしてゆく。わたしは毎年この屈辱を味わわれるのである。

女子社員でも勢力のいい側につこうとする者もいる。たとえば、わたしと机を並べている管理係の鈴木信子がそうである。彼女は内勤次長の富崎に何かと気に入られるようにしている。もちろん、同時に課長の杉岡にもおこたらず気をつかっている。

彼女はT塾出身で、家族は母親ひとりである。学校時代から成績のいいことをじまんしている。今でもそれを同僚にちらちらとほのめかす。この自信が女子でも男子社員同様に出世ができると錯覚させているのかもしれない。あるいは彼女よりも無能な男子社員を見て自分を奮起させているのかもしれない。

鈴木信子はきれいな顔つきをしている。彼女が主流とむすぼうとしている自信の底には、彼女の實力以外に、容貌への持^もみが大きいかもしれない。女性にたいしてはとりすましてゐるが、歩いていても、男子社員の前だと嬌態^{しな}をつくっているようにみえる。上司にものをいうときは、意識してコケティッシュにしているようにみえる。

容貌の点で大切にされようと心がけているのに計算係の橋本啓子がいる。彼女は短大出だが、鈴木信子同様、容貌への自負はそうとうなものである。鈴木信子が洗練された身ぶりと装いを凝らしているのに反して、橋本啓子は社交性と派手な容姿で信子と対抗している。この二人はわた

しより一年後輩で、入社五年である。鈴木信子と橋本啓子とは、八人の中で特別に発刺としてゐる。してみると、会社勤めでも、美しい女性に勝ちかもしれない。

不幸にして美貌をもたず、さほどの才能もない女性たちは、いまのままであきらめなければならぬ。彼女たちは男子社員に人気もないし、恋愛にも絶望している。たのしみは何であらうか。それは、せつせと金を貯蓄することだ。タイプの的場郁子（よしみ）がその型である。的場郁子は入社して二十年にもなり、年も四十歳ちかい。彼女は額が広いので、年をとるにしたがつて禿はげげあがつたようにみえている。その下に落ちくぼんだ眼と、貧弱な鼻と、まずしい唇とがある。頬骨ほぼねははり、眼尻には皺がよっている。

彼女はめつたに化粧をしない。高い化粧品を買つても、しょせんは無駄だとさとしてゐるらしい。彼女はあらゆる男子社員を軽蔑している。タイプには、ほかに池田素子、村瀬百代がゐる。二人とも入社三年である。

彼女たちはいつも、主任格の的場郁子に小言をくつてゐる。いったい、四十二人の男子社員のタイプ原稿は、的場郁子がまとめてうけとつてから、ほかの二人に分担させるようになってゐるが、仕事の分配にも彼女の好悪があらわれている。村瀬百代はあまり美しくないのとたくさん仕事をもらう。池田素子は美しいので仕事が少ない。

仕事が多いと負担がおもくなるので気の毒だ。というのは、うわべの感想で、じつは仕事が多いのが彼女たちの誇りなのである。その村瀬百代にしても、かげではたえざる的場郁子の悪口をいっている。

悪口はきまつて同じ話題だった。つまり、的場郁子がいかに吝嗇りんしやくで貯蓄に熱心であるかにかかつてゐる。彼女はけつして社内の食堂では昼飯を食べない。食堂は外部よりもずっと安くしてあ

るが、的場郁子はけっして食券を購^{あが}ったことがない。社内伝説によれば、朝飯はインスタント・ラーメン、夕食はお惣菜屋で売れのこりのコロッケを買って帰るということだった。貯蓄は、銀行の定期預金のほかに、当世流行^{はや}りの投資信託に加入しているらしい。

もつとも、女も老いてくると金だけがたよりになってくる。その意味で的場郁子の方法はけっしてまちがってはいない。しかし、だれよりも金をもっているというところで、彼女の意識の中には男子社員への優越があるのかもしれない。

彼女の骨ばった身体が前屈^{かが}みのかたちで歩いているのを見ると、かげ口でいわれる「栄養失調」も、あながち理由のないことではないようにおもわれる。

課長の杉岡久一郎は、T大を出てすぐこの社に入社した。社歴は十七年である。

彼は背が高く、典雅な身体つきをしている。いつもびっちりと身体に合った洋服をきて、少しのゴミでも気にして長い指先ではじく性質^ただ。容貌も上品な風格がないではない。額が秀でて、鼻梁^{はなばし}が高い。少し額^{おでこ}がみじかいのも上品な感じをあたえる。かれの高い鼻に黒縁の眼鏡がおさまっているところも、ちょっとしたダンディの感じである。顔色がゴルフやけで浅黒いのも当世風である。

杉岡久一郎は、その眉の間にいつもかすかな憂いに似た皺を立てている。課員の前ではめったに笑い顔をみせない。動作はどこまでも紳士的で、言葉づかいもていねいだ。むろん、このていねいさの中には、かれの傲慢さと、相手への軽蔑がふくまれている。言葉はわざと低目に発音する。かつて重役のだれかに、君は先々代の羽左衛門に似ている、といわれて、ひどくそれが気に入っている。